東日本大震災追悼・復興祈願祭

被災地へ神道、キリスト教、仏教の祈りを　鎌倉

鎌倉宗教者会議主催（会長：吉田茂穂・鶴岡八幡宮宮司）の東日本大震災追悼・復興祈願祭が3月11日、カトリック雪の下教会（古川勉主任司祭）で執り行われた。この祈願祭は東日本大震災の一カ月後に鶴岡八幡宮で第1回が行われ、今年で9回目になる。鎌倉の神職、僧侶、司祭、牧師が心を一つにして共に震災の犠牲者を哀悼し、被災者に思いを寄せて祈りを捧げ、一般参列者も大聖堂で焼香をし、祈りを捧げた。

東日本大震災追悼・復興祈願祭「仏教の祈り」

午後2時35分、聖歌「谷川の水を求めて」の合唱の中、神道約20名、キリスト教約10名、仏教約60名が大聖堂に入堂し、地震発生時刻の午後2時46分に鐘の音と共に全員で1分間の黙祷。教会から一切の音が消え静寂になった。

最初に鶴岡八幡宮をはじめ鎌倉の神社の神職、約20名による「神道の祈り」が捧げられた。修祓に続き神職と参列者全員が大祓詞を唱え、玉串を奉って拝礼した。

次に「仏教の祈り」が導師・浄土宗大本山光明寺法主・柴田哲彦台下と鎌倉市内外の約60名の僧侶により唱えられた。導師が「表白」を奏読した後、僧侶と参列者全員が観音経世尊偈を読経した。導師と共に参列者全員が「願わくは此の功徳を以て、平等一切に施し、同じく菩提心を発こして、安楽国に往生せん」と「ご回向」を唱和して仏教の真摯な祈りを被災地に送り「仏教の祈り」を執り修めた。

次に鎌倉市内キリスト教諸教会（カトリック教会、日本基督教団、日本聖公会、日本キリスト教会）の司祭、牧師、および女子修道会、信徒による「キリスト教の祈り」が捧げられた。聖歌「ガリラヤの風かおる丘で」の後、日本キリスト教会鎌倉栄光教会・白井献牧師が祈りを捧げた。

「今日は2011年に起こった東日本大震災の事を思い起こす日。多くの人々が災難に遭い、原発事故によって命を失い、財産を失い、故郷を失った。いまだに避難生活を強いられ、心にも体にも、また生活にも傷を負っていることを思わずにはいられない。願わくはすべてをご存知の父なる神が一人ひとりを慰め、力づけてくださるよう切に願い、私たちがどのようにしたら互いに重荷を負い合うことができるかを教えてくださるよう願う。今この時、共に祈っている被災者の方々の上に恵みと平安がありますように」

カトリック雪の下教会のヌカボグ・スダーカル神父による聖書朗読が行われ、マタイによる福音書5章1節から10節までを朗読。日本基督教団大船教会の松下道成牧師が「私の魂は苦難を味わい尽くし、命は黄泉に臨んでいる。あなたは私に声をかけてくれた。手を差し伸べてくれ、一緒に食事をし、夜を過ごし、学校に行き、担ぎ、手をつないでくれた。一緒に泣いて、笑ってくれた。一緒に生きることを考えてくれた。もう二度と人を愛せないと思ったけれども、人を愛することを思い出させてくれた。私はそれを忘れない」と祈った。

カトリック雪の下教会のチェ・ウォンテ神父が「主の祈り」を捧げ、日本聖公会鎌倉聖ミカエル教会の北澤洋司祭が「結びの祈り」を捧げた。

最後に、讃美歌「いつくしみふかき」が大聖堂に響く中、鎌倉宗教者会議の役員が共に献花した。

古川主任司祭は「8年が経ち震災を忘れた方がいるかもしれないが、いまだに苦しんでいる人もいる。私たちは宗教者として、亡くなった方々、ご遺族の方々のため、復興のために毎年心を一つにして祈っている。また風評被害で苦しむ地方の農産物を買っている。今年、教皇フランシスコが日本に来られるが、震災のことも伝えられるだろう」と語った。

岡山の春を彩る宗忠神社「御神幸」

被災者慰霊、被災地復興の祈り　岡山市

アーケード街を行く御神幸の行列

市内各所の桜が満開になった「2019岡山さくらカーニバル」最終日の4月7日、岡山市北区上中野（通称・大元）にある宗忠神社の「御神幸（ごしんこう）」が、同市中心部で古式ゆかしく行われた。午前8時、平安貴族風の装束をまとった約800人の一行が宗忠神社を出発し、御旅所のある後楽園までの往復約12キロを練り歩いた。行列は全部で5陣。第一陣は鼓笛隊の後に五色幟がひるがえり、緑の大榊が担がれる。第二陣は、御神幸奉員長が人力車に乗り、山車に乗った楽人たちが吉備楽の優美な音を奏で、宮司らがゆみなく大祓言葉を唱え続ける後に、御祭神の宗忠大神を遷した神輿の御鳳輦（ごほうれん）と、大正時代の馬車に乗った斎主の黒住宗道教主と副斎主の黒住宗芳令嗣、そして鉾や弓などの御神宝が続く。第三陣は、元気のいい子どもみこしに御弓箱、太刀箱などが続いていた。

表町商店街のアーケード街から、就実高校バトン部と県立岡山東商業高校ブラスバンド部が先頭に付き、華やかににぎやかにパレードを盛り上げ、沿道の市民らから盛んな拍手を浴びていた。

今回の御神幸には昨年、岡山県を襲った西日本豪雨による犠牲者の慰霊と被災地の復興祈願も込められている。御神幸は東日本大震災が起きた平成25年にも3週間後の4月3日に行われた。黒住宗道教主は「これは歌舞音曲ではなく祈りですから。68年前には戦後復興への祈りとして再興しました」と語っていた。

御旅所になっている後楽園では、鶴鳴館前で黒住宗道教主が世界平和を願って祝詞を奏上。花見客や外国人観光客らが、行列や儀式に興味深そうに見入っていた。

行列は午後1時過ぎに後楽園の御旅所を出発し、岡山駅を経て、午後3時に宗忠神社に還りついた。

御神幸の始まりは、宗忠神社が鎮座した翌明治19年に、御祭神が在世中に奉仕していた今村宮（池田藩の守護神社）への鎮座報告にあわせて、神恩に感謝し、世界の平和と万民和楽を祈って御鳳輦の渡御を行ったこと。その後、行列の市中巡幸を熱望する市民の声が高まり、明治24年から名園・後楽園を御旅所とする岡山のみ祭りとなった。今年で1333回目。

黒住教は、今村宮の神官だった黒住宗忠が江戸時代の文化11年（1814）に開いた教派神道。流行病で父母を亡くした宗忠が、文化11年の冬至の出を拝む中、天照大神と一体になる体験をしたのが黒住教の始まり。以後、宗忠は病気治しや日々の心がけを説く宗教活動を始めた。

文久2年に京都の神楽岡に創建された宗忠神社は慶応元年（1865）、孝明天皇により勅願所となる。明治政府が神社の国家管理を進める中、黒住教は宗教としての伝統を守ろうと明治9年、神道黒住派として独立した。

車上から沿道のお年寄りたちに挨拶する黒住宗道教主（右）と令嗣の黒住宗芳師

灯

「時間になったので、イエスは食卓につかれ、使徒たちも共に席についた。イエスは彼らに言われた、『わたしは苦しみを受ける前に、あなたがたとこの過越の食事をしようと、切に望んでいた…』。…またパンを取り、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた、『これは、あなたがたのために与えるわたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい』。食事ののち、杯も同じ様にして言われた、『この杯は、あなたがたのために流すわたしの血で立てられる新しい契約である。』」（ルカ22・14―20）

西方キリスト教の暦では4月14日から聖週間に入り、キリストの受難と死と復活を記念する。イエスは捕えられる前夜、弟子たちと共に食卓を囲み、パンと葡萄酒を祝して与えた。これを、キリストの御体と御血として、再び来られる日までの信じる者たちの生命の糧とした。主の来臨を待ち望むキリスト者は、主と共に再び食卓を囲む日を待ち望んでいる。その日は「小羊の婚宴」の時、喜びの一日となるはずである。（I）

天地

3月中旬、二つの自治会でお守りしている小さな祠のような地神（おじん）さんのお祭りが済むと、田植えに向けて田起こしの始まり。大型のトラクターを導入したので、オペレーター1人の作業で15ヘクタールが2日で終わった。天地子が子供のころの、牛を使っての作業に比べると驚異的な速さ▼4月中旬からコシヒカリを8ヘクタール植えるので、田んぼごとに堰を修繕する。排水口を数枚重ねた板とビニールで寒く作業で、板は数年で腐るので取り換える。堰がコンクリート製だと簡単だが、畦土のままだと板を受ける杭を打ち込む。杭が腐っていると代えないといけない。これは5人で1日半かかった▼天地子の朝一番は愛犬との散歩。毎日コースを変え、田んぼの様子を見まわる。3月下旬には小麦が穂を出してきた。うどん用の小麦で、県の試験場と国立大農学部が開発した新品種。昔風の風味があり、オーストラリア産に勝てるとのうたい文句だが、まだ道は険しい▼先日、酒造会社との懇談会があり、県特産の酒米を増産してほしいとの依頼。ヒノヒカリを数枚減らし、酒米を植えることにする。宣伝にも力を入れるというので、期待したい▼自治会も役員が交代。4月に2校を統合した小学校が近くに開校することもあり、環境省の補助金を受け、環境整備や美化の活動を、里山クラブを設け、3年計画で実施することになった。忙しくなるが、子供たちの笑顔を見られるのが楽しい。

社説

「令和」に込められた思い

5月1日から使われる新元号「令和」の典拠は天平2年（730）正月13日、大宰府で行われた「梅花の宴」を記した、『万葉集』「梅花の歌」32首の序文にあることが発表されたのを受け4月1日、楠田大蔵太宰府市長は喜びのコメントを発表した。

この「梅花の宴」を開いたのは、万葉集の選者・大伴家持の父・大伴旅人で、大宰府の長官だった彼は大納言に昇進して都に戻ることになり、大宰府の役所が管轄していた西海道（九州）の官人たちを邸宅に招き宴を開いたのである。

それを70年さかのぼる663年、唐と新羅の連合軍に白村江で完敗し、4万2千の兵を失った日本は唐の侵攻に怯えていた。それを追い風に統一国家づくりを進めたのが中大兄皇子、後の天智天皇である。

白村江敗戦後の日本

中村修也文教大学教授は『天智朝と東アジア』（NHKブックス）で、当時の日本は実質的に唐の支配下にあったという。中国・朝鮮の文献も駆使し、羈縻（きび）政策と呼ばれる唐の間接支配を受けながら、天智朝の律令制が整備されたとの説である。つまり、第二次世界大戦後の日本が、米国の間接統治の下で民主化されたのと同じことが、白村江戦後にあったのである。

日本の正史『日本書紀』は天智朝を滅ぼした天武朝によって書かれたので、不名誉な羈縻政策は隠された。天智時代の急激な唐化に対する国内勢力の反発は、開国に舵を切った徳川幕府に対する攘夷運動にも似ている。討幕が成ると、攘夷を忘れ開国に転じたのは、天武朝での律令制の進展と同じだと中村氏は言う。

白村江の戦後処理で、唐は百済と日本に対する羈縻政策を進め、665年には約2千の官僚を倭国に派遣し、667年に筑紫都督府を設置した。間接統治の始まりで、唐の官僚は大和にも進出し、都を近江に遷させた。

並行して、百済人を使って対馬から畿内に至る要所に山城を設け、烽火による通信を可能にした。山城は唐の侵入を防ぐためとされるが、軍船を防ぐには不向きで、むしろ、唐が監視と通信用に設けたとする方が合理的で、太宰府の水城は南九州からの反乱を防ぐためだという。

唐の羈縻政策が終わったのは、高句麗滅亡後、朝鮮を統一した新羅が反唐政策に転じたからである。

天武朝からは新羅と連携して唐に反抗したため、骨品制を残すような新羅的な律令制が導入されることになる。官僚制を取り入れながら科挙は実施せず、役職を家業的にしたのも、豪族の連合支配に沿う日本的受容だろう。強い新羅の存在が日本にとっては僥倖だった。確かに、唐が賠償も要求せず、低姿勢で友好を求めてきたという日本書紀の記述はおかしい。

唐の冊封を受けた新羅が高句麗を滅ぼし、唐の影響力も排除して朝鮮半島を初めて統一したのは676年。その後、再び唐の冊封を受け、中央集権国家を建設しながら仏教を保護し仏教文化が栄えるが、やがて衰亡に向かう。

日本は668年から遣新羅使の派遣を始め、672年の壬申の乱で勝利した大海人皇子（後の天武天皇）は親新羅政策をさらに進め、次の持統天皇も亡夫の外交方針を継いだ。もっとも、対等の関係は認めず、新羅が日本に朝貢する関係をとった。梅花の宴が催されたのは、東アジアにつかの間の平和が訪れていた時で、大伴旅人はそれを喜んだのであろう。

伝統と革新

古代の律令化と戦後の民主化を比べると、いかにも日本的な手法が似ている。一旦は受け入れ、その後、日本的なものに変容していく。明治の近代化も同じで、神武統治に戻った上で近代国民国家づくりを進め、昭和天皇は明治天皇の五箇条の御誓文をいわゆる人間宣言の根幹に据えられた。

伝統的文化とはそういうもので、古来から積み上げてきた価値を大切に守っているから、新しい時代にも柔軟に対応し、自らを変えていくことができる。厳しさを増すであろう国際社会で、新しい御代の日本もそうありたい。

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net

©宗教新聞社 2019

購読料(税込)
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

本紙定期購読のお申し込みは
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話03（3353）2940
FAX03（5363）5182
e-mail:religion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円(税、郵送料を含む)

縄文のパワーフィールドへ
神道よ! 今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ!
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり!
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162-0821 東京都新宿区津久戸町3-11
電話:03-6265-0852 FAX:03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠著 四六判・520頁 定価:本体2,000円+税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078(882)9305 FAX078(801)0006

日本よ、蘇れ 日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機…。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか?
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

日本国始め 饒速日大神の東遷
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して纏向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
大野七三 著
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
四六判87頁／本体価格500円（定価：本体2000円+税）
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

たま出版
www.tamabook.com
魔のJR中央線
自殺霊の撮影で判明したこと
齋藤 齋霊 著
十年の歳月をかけ、ついに自殺者の霊の撮影に成功。霊能者が書いた自殺防止の書。死んでも痛みは残るもの、自殺者の言い分、"こんな筈では…"自殺をした状態で霊はさまよう、硫化水素自殺、政治家と自殺、自殺の多いJR中央線の謎を解く!
四六判158頁 定価1,365円(税込)
アシレス出版部発行
お近くの書店にない場合は下記へ 送料210円
〒229-0002 相模原市渕野辺本町2-17-14
TEL042(751)2558 FAX042(754)1818

新刊!
人生の苦しみに積極的な意味はあるのか?
『21世紀に生きる日本人のための浄土恵想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
私の生命の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円+税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか?
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

読みやすく、理解しやすく、真髄を極める達意の新訳
クルアーン やさしい和訳
監訳著・水谷 周 訳補完・杉本恭一郎
2019年2月発刊 定価2700円+税
国書刊行会
〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL:03-5970-7421